

## 自殺が起きた場合のスタッフの支援方法と支援体制を考える ―精神保健看護分野のポストベンション―

○小山 達也<sup>1)</sup>、河野佐代子<sup>2)</sup>、北野 進<sup>3)</sup>、田嶋佐知子<sup>4)</sup>、田中 浩二<sup>5)</sup>、田久保美千代<sup>6)</sup>

- 1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科博士後期課程、2) 慶應義塾大学病院看護部・医療連携推進部、  
3) 地方独立行政法人東京都立病院機構東京都立松沢病院、4) ホウカンTOKYO教育・研究企画部、  
5) 金沢大学医薬保健研究域保健学系、6) 慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科後期博士課程

精神障害を患った方の支援は、精神障害にも対応した地域包括ケアシステムのなかで、誰もが安心して自分らしく生活することができるように、地域共生社会の実現に向けて様々な取り組みが進められています。

メンタルヘルスの問題を抱えた方の支援の難しさの一つに、自殺の危機にある対象者のケアがあります。精神科病院では、精神疾患を抱えた方の自殺リスクへの対応が求められますし、総合病院では、近年がんを患う方や妊産婦への自殺予防が重要視されてきています。また地域のなかで暮らす精神障害者の生活を支える訪問看護ステーションでの自殺対策も精神保健看護分野に関わる人たちの重要な役割となっています。自殺対策に関わる看護師、保健師や助産師などのスタッフは、対象者との関係性のなかで連続性のあるかわりをする特徴があります。こころの危機や精神障害を抱えながら生きることを支えるために、自殺予防の取り組みが領域横断的な連携が強化されながら、支援を充実させていくことがより必要なことは言うまでもありません。

一方で私たちは、患者さんや利用者の方が、自ら死を選ばざるをえなかった状況にも現実には直面しています。直面したスタッフは、その死に大きな衝撃を受け、「なぜ防げなかったのか」「もっと話を聞いていれば」「どうしたらよかったのか」と考えざるをえない経験となります。なぜ自殺が起きたのかという問いを立てても、その理由を明確にすることは難しく、自殺が複合的な要因の重なり合いで起きることを理解している専門職であっても、その現実を受けとめることが難しい場合があります。

自殺対策では、自殺予防と同様に、自殺が起きた場合のポストベンションの重要性が指摘されていま

す。現実には自殺が起きた場合には、どのようにスタッフを支えればいいのか、どのような体制で支援するのかを模索しながらサポートしている状況があると思います。

自殺の影響は、発見したスタッフに限らず、受け持ちスタッフ、事前に対応していたスタッフなど多岐に渡る場合があります。同僚や管理者として支援するには、どのように声をかけたらいいのか、その死を受け止められるようには何ができるのか、悩みや迷いも生じるかもしれません。過去に支援の立場にいた人からは「どんなふうに声をかけたらいいのかわからなかった」「あのとときの支援でよかったのか」と回顧する声も耳にします。

ポストベンションの理解と支援方法や支援体制の充実は、誰もが安心してケアを続けるために必要不可欠なことだと思います。本ワークショップでは、精神科病院・総合病院・訪問看護ステーションなどの医療関連施設で自殺が起きた場合のスタッフの心理状態の理解を深め、支援方法や支援体制を考える機会とします。精神保健看護分野で実践している支援や、それを裏付ける学術的な背景を参加者の皆様との交流を通して学び合いたいと思います。

本ワークショップで取り扱う事例は、複数の事例を組み合わせながら、匿名性を担保し、臨床実践で起こる状況に近い架空の事例を扱う倫理的配慮を行います。過去に対象者の自殺未遂や自殺を経験した方にとっては、その経験を思い出すご負担もあるかもしれませんが、スタッフの心理や支援に詳しい実践や専門家が、心理的負担にも配慮しながら、ワークショップを運営いたします。皆さんと学び合うことを通してよりよい実践の検討につながればと思います。